天草市文化財調査報告書　第８集

国指定史跡　棚底城跡Ⅳ

平成27・28年度発掘調査
（第3・4次発掘調査）

2020

天草市教育委員会

序　　文

本書は、天草市唯一の国指定史跡「棚底城跡」において平成27年度及び平成28年度に実施した第3次・第4次発掘調査の成果をまとめた報告書です。

戦国時代の天草は現在の上天草市、天草市、苓北町、鹿児島県長島町の範囲を5人の領主、いわゆる天草五人衆が分割統治していました。天草五人衆とは大矢野氏、上津浦氏、栖本氏、天草氏、志岐氏のことで、彼らは大勢力である菊地氏、相良氏、大友氏、島津氏等の情勢を見極め、柔軟に対応しながら生き抜いてきました。

棚底城跡は上津浦氏と栖本氏が棚底地域の知行を巡って争った際の舞台として、相良氏の重臣が記した『八代日記』に記録が残っています。1544年から1565年頃まで棚底を巡る抗争「棚底抗争」が繰り広げられたことが記録されていることから相良氏がその時期に天草地域の動向を気にしていたことが分かります。また、平成14年度から3年間かけて天草郡倉岳町が行った発掘調査では、全ての曲輪で柱穴が見つかったほか、茶の湯道具、碁石、海外産の陶磁器が出土しています。これらの成果をまとめた『棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡』を平成21年3月に刊行し、その年の7月23日に肥後天草地域の政治・軍事の変遷を知る上で貴重な遺跡として国指定史跡になりました。

天草市教育委員会では、平成23年度に『史跡棚底城跡保存管理計画書』、平成28年度には『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を刊行し、整備に向けて動き出したところです。本書は『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を作成する上で、遺構の確認が必要になったことから12年ぶりに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の整備を考える上で重要な情報が得られたと確信しております。本書が史跡整備をはじめ、様々な分野で活用されることによって文化財に対する理解の一助となることを願います。

終わりに、調査の実施、指導等につきまして多大なお力添えを賜った関係者、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

令和2年3月

天草市教育委員会　教育長　　石井　二三男

本　文　目　次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

第３章　調査の成果
　第１節　平成２７年度トレンチ調査（第３次発掘調査）・・・・・・・・・・・・・・５
　第２節　平成２７年度出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
　第３節　平成２８年度トレンチ調査（第４次発掘調査）・・・・・・・・・・・・・２２
　第４節　平成２８年度出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

第４章　総括
　第１節　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

図　表　目　次

図１　　棚底城跡周辺の遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
図２　　平成２７年度発掘調査のトレンチ配置図（第３次発掘調査）・・・・・・・・・７
図３　　Ｔ１５０１平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
図４　　Ｔ１５０１土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
図５　　Ｔ１５０２平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図６　　Ｔ１５０２土層図①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
図７　　Ｔ１５０２土層図②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
図８　　Ｔ１５０２土層図③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
図９　　Ｔ１５０２土層図④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
図１０　Ｔ１５０３平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
図１１　Ｔ１５０３土層図①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
図１２　Ｔ１５０３土層図②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図１３　Ｔ１５０１出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
図１４　Ｔ１５０２出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
図１５　Ｔ１５０３出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

図１６　出土トレンチ不明遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
図１７　平成２８年度発掘調査のトレンチ配置図（第４次発掘調査）・・・・・・・・２３
図１８　Ｔ１６０１平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
図１９　Ｔ１６０１土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
図２０　Ｔ１６０１出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

表１　　平成２７年度（第３次）発掘調査出土遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・２１
表２　　平成２８年度（第４次）発掘調査出土遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・２６

写　真　図　版　目　次

写真図版１　　Ｔ１５０１平面
写真図版２　　Ｔ１５０１横堀土層
写真図版３　　Ｔ１５０２平面
写真図版４　　Ｔ１５０２土層
写真図版５　　Ｔ１５０３平面
写真図版６　　Ｔ１５０３土層
写真図版７　　Ｔ１６０１東側平面
写真図版８　　Ｔ１６０１西側平面
写真図版９　　Ｔ１６０１掘立柱建物検出状況
写真図版１０　Ｔ１６０１石積検出状況
写真図版１１　Ｔ１６０１平面
写真図版１２　竪堀を塞ぐように構築された石積の一部
写真図版１３　平成２７年度（第３次）発掘調査出土遺物
写真図版１４　平成２７・２８年度（第３・４次）発掘調査出土遺物

凡　例

1．本書は、平成 27 年度及び平成 28 年度にかけて天草市教育委員会が埋蔵文化財発掘調査事業として実施した棚底城跡第 3・4 次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．報告書作成作業は平成 31 年度（令和元年度）に実施している。

3．調査の実施にあたっては文化庁国庫補助事業を活用した。

4．本書に掲載した座標は世界測地系に基づくものである。

5．本書に掲載した遺構実測図作成及び調査時の写真撮影は中山圭、遺物実測図作成及び遺物写真撮影は宮﨑俊輔、遺構図面トレース作業は森友李夏、遺物図面トレース作業は宮﨑が行った。

6．調査の進捗については両年とも史跡棚底城跡整備活用基本計画策定検討委員会、熊本県教育庁文化課の指導を受けた。平成 27 年度には文化庁、南九州城郭談話会、平成 28 年度には愛媛県埋蔵文化財センターの柴田圭子氏、今治市村上水軍博物館の田中謙氏からも調査指導を受けた。

7．発掘調査によって得られた出土遺物等は天草市文化財収蔵庫に保管している。

8．本書の執筆・編集は宮﨑が行った。なお、遺構及び遺物に関する情報は中山の所見を参考にした。

第１章　調査の概要

第１節 調査に至る経緯

天草市では、旧天草郡倉岳町(以下、旧倉岳町と称す)の頃より棚底城跡の測量調査・発掘調査に取り組んでいる。旧倉岳町の町史編纂事業の一環として平成 14 年度から始まった調査は当初、縄張り把握のための測量調査とⅠ郭(主郭)の遺構の残存状況の確認のためのトレンチ調査を実施していた。この際に岩盤を鑿状のもので掘り込んで成形したと思われる柱穴等が多数確認され、遺構の存在が確認された。これを機に発掘調査を平成 16 年度まで実施し、Ⅰ郭は全域、Ⅱ～Ⅷ郭はトレンチ調査を行った。平成 21 年 7 月 23 日には国指定史跡となり、平成 23 年度に『史跡棚底城跡保存管理計画書』を策定した。平成 28 年度には『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を策定する。これらに基づく史跡整備を行っていくうえで、平成 27 年度から遺構の確認を目的とする発掘調査を 12 年ぶりに実施することとなった。

これまでの調査で全ての曲輪に岩盤を掘削した遺構が検出され、軟質の岩盤を加工・利用していたことが確認された。また、出土遺物は 14 世紀～16 世紀の幅であり、一般的な中世城跡に比べると貿易陶磁器が多く、土師器の比率が低いことが特徴として挙げられる。遺物で特に注目されるのは、石製風炉や天目碗等の茶の湯道具とベトナム産陶磁器である。これらの成果は熊本県内にはあまり類例がない。

第２節 調査組織

平成 27 年度(第 3 次)発掘調査

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	天草市教育長　石井二三男
調査総括	文化課長　山本幸伸
調査事務	文化課文化振興係長　赤星潤一
調査担当	文化課文化振興係主査　中山圭
調査指導	【史跡棚底城跡整備活用基本計画策定検討委員会】 鶴嶋俊彦(委員長・熊本城調査研究センター)、歳川喜三生(副委員長・天草市文化財保護審議会委員)、稲葉継陽(熊本大学)、山尾敏孝(熊本大学大学院)、田中哲雄(元東北芸術工科大学)、髙田護(倉岳まちづくり協議会)、松髙文武(棚底地区振興会) 【文化庁】近江俊秀 【熊本県教育庁文化課】長谷部善一、木庭真由子

【南九州城郭談話会】有川孝行、下鶴弘、常田和彦、吉本明弘
調査協力　【倉岳支所】山並正
発掘作業員　溝畑一光、吉田卓哉、坂元元八

平成 28 年度（第 4 次）発掘調査
調査主体　天草市教育委員会
調査責任者　天草市教育長　石井二三男
調査総括　文化課長　稲田正一郎
調査事務　文化課文化振興係長　赤星潤一
調査担当　文化課文化振興係主査　中山圭
調査指導　【史跡棚底城跡整備活用基本計画策定検討委員会】
鶴嶋俊彦（委員長・熊本城調査研究センター）、歳川喜三生（副委員長・天草市文化財保護審議会委員）、稲葉継陽（熊本大学）、山尾敏孝（熊本大学大学院）、田中哲雄（元東北芸術工科大学）、高田護（元倉岳まちづくり協議会）、松髙文武（棚底地区振興会）
【熊本県教育庁文化課】長谷部善一、木庭真由子
【愛媛県埋蔵文化財センター】柴田圭子
【今治市村上水軍博物館】田中謙
調査協力　【倉岳支所】山並正
発掘作業員　溝畑一光、吉田卓哉

平成 31 年度（令和元年度）発掘調査報告書作成作業
作業主体　天草市教育委員会
作業責任者　教育長　石井二三男
作業総括　文化課長　丸林眞吾
作業事務　文化課課長補佐（世界遺産・文化財係長）　村田清也
文化課世界遺産・文化財係参事　松本博幸
作業担当　文化課世界遺産・文化財係学芸員　宮﨑俊輔
作業助手　文化課世界遺産・文化財係非常勤学芸員　森友李夏

第２章　遺跡の立地と環境

第１節 地理的環境

棚底城跡は熊本県天草市倉岳町棚底字尾崎所在の中世城跡である。天草市は熊本県の南西部に位置し、東シナ海・有明海・八代海に囲まれた大小 120 程度の島々で構成されている。倉岳町は天草上島の南側にあり、天草市最高峰の倉岳を有する。冬には通称「倉岳おろし」と呼ばれる非常に強い北風が吹くことで知られ、麓の棚底地区には算木積みで防風石垣が組まれた独特の集落景観が広がる。棚底地区は扇状地であるため、大型の礫が豊富に取れ、水はけが良い。その一方で、礫層は相当な厚さがあり、肥沃とはいえない。

第２節　歴史的環境

棚底城跡周辺は図 1 に示すように現在の海岸沿い及び国道沿い、山間部にそれぞれ分布が集中している。縄文時代の遺跡が多く、広い範囲に分布している。また、市指定史跡「宮崎石棺墓群」のように古墳時代の遺跡も散見され、中世に属すと考えられる遺跡は棚底城跡のほかには大権寺遺跡と八竜遺跡のみとなっている。しかし、棚底地区の住民によれば畑からよく茶碗の破片が出るという話もあることから、現在の集落と中世の集落が重なっている可能性もあることは留意しておきたい。いずれにせよ、棚底城跡周辺の遺跡については発掘調査等が行われていないため、不明な点が多い。

中世については、大権寺遺跡が重要となる。従来から石塔記念銘として天草最古となる延文 3 年(1358)をもつ石塔部材を筆頭に多数の石塔残欠があることで知られ、棚底城跡の築城主体と関わる可能性をもつ遺跡である。また、棚底城跡と扇状地を挟んで向かい合う西側丘陵部は地元では「城山」と呼ばれている。明確な遺構は確認できないが頂上部のみ削平されている。倉岳町所在の明確な城跡としては、宮田城跡や名桐城跡がある。宮田城跡には竪堀、土橋等の遺構が良好に残っており、表面採集された陶磁器から 15～16 世紀後半に比定されよう。名桐城跡は全長 350m に及ぶ細長の縄張りで、東西に走る尾根上に連続する 3 つの丘を主要な曲輪として削り出し、周囲に竪堀を施している。名桐城跡の近くには「家久栄」という地名があり、八代日記に記載のある「藤河栫」と関係すると考えられている。今後の位置特定が重要な地域である。これらの城跡は棚底城跡に隣り合っており、上津浦氏及び栖本氏による棚底を巡る抗争の中で機能していたと思われる。

1.棚底城跡　2.大権寺遺跡　3.山仁田遺跡　4.歳川遺跡　5.毛首遺跡　6.房崎遺跡
7.宮崎石棺墓群 8.宮崎遺跡　9.八竜遺跡　10.曙遺跡　11.小崎遺跡　12.下塔尾遺跡
13.小鳴遺跡

図１：棚底城跡周辺の遺跡分布

近世になると、豊臣秀吉による九州征討後には小西行長の下に置かれた。いわゆる天草五人衆(天草氏・大矢野氏・上津浦氏・志岐氏・栖本氏)と小西行長の間で天正 17 年(1589)に勃発した天正天草合戦を経て、改めて小西行長の統治下におかれ、在地領主として地域支配を行うこととなった。文禄・慶長の役にも参戦するが、中世に導入されたキリスト教が諸島全域に拡大し、コレジヨの誘致等が行われている。しかし、棚底周辺についての歴史は詳らかでなく、隣接する宮田村までは栖本氏がキリシタンになった影響で宣教が行われたことまでしか分かっていない。

第３章　調査の成果

第１節　平成２７年度トレンチ調査(第３次発掘調査)

平成 27 年度実施の第 3 次発掘調査はＩ郭北西部の土塁、横堀、竪堀の延長と構造確認目的で 3 箇所にＴ1501～Ｔ1503 のトレンチを設定した(図 2)。

■Ｔ１５０１(図３・４/写真図版１・２)

約 2.1m×約 7.0mで設定した。Ｉ郭に近いトレンチ東側では横堀を検出し、その幅は約 2.0m で現地表面からの深さは約 0.7m である。薬研堀とみられ、堀底は岩盤を粗く削られている。Ｉ郭側からの流れ込み土の上に耕作土や表土が堆積している。横堀から西側に立ち上がると岩盤の平坦面が約 4m続き、少し段落ちする。

過年度調査において、1T-b トレンチで 2 重目の土塁を断ち割る調査をしている※。その際に土塁の「基底部は幅 4.7m」で「積み土は版築状態にあったが、分層するには、非常に分かりづらい状況」と報告されている。また、「現存する土塁は、基底部が幅 3m」であることから「後世にかなり削られている」としている。この成果を踏まえると、Ｔ1501 で検出された岩盤の平坦面は約 4.0ｍであることから土塁の基底部と想定することができる。第 4 層から近世陶器が出土していることから江戸時代以降に土塁の積み土を崩して畑をつくり、現在の搦め手の地形が形成されたと考えられる。

以上のことから、現在 2 重目の横堀は里道付近を境にＩ郭南西側には延びていないように見えるが、中世段階には存在していたことが証明された。横堀はＩ郭側からの流れ込みにより埋没しており、土塁は江戸時代以降の開墾により基底部を残すのみとなったと考えられる。ただし、土塁を崩した土の行方について検討する必要はある。

■Ｔ１５０２(図５～９/写真図版３・４)

約 2.0m×約 5.0mで竪堀を横断するように設定した。竪堀を塞ぐようにある石積は近世以降の造作であることが判明し、西側に僅かにカーブしていることも分かった。16 世紀中葉～後葉の翡翠釉小皿等が出土している。

ｆ－ｆ’土層断面では薬研の竪堀が確認できる。ｄ－ｄ’土層断面でも竪堀が確認できるが、ｄ側の立ち上がりは確認できていない。したがって、麓からＴ1503 方面に僅かにカーブしていると考えられる。

■Ｔ１５０３（図１０～１２/写真図版５・６）

約 2.0m×約 4.0mで設定した。Ｔ1501 とＴ1502 の間に設け、Ｔ1501 から一段下がる場所である。トレンチ内で若干の窪みは見られるものの、明瞭に横堀や土塁と決定づけられるものは検出できなかった。土層は表土、耕作土と続き、第 3 層以下は地山の礫等が入り込んでいることが分かる。周辺に石積が構築されており、畑として江戸時代以降に使われていたことが想定される。包含層が検出できない点や遺物が殆ど出土していない点から本トレンチは後世の造作により中世段階の層がとんでいると考えられる。

※中山圭編 2009『棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡』天草市文化財調査報告書第 2 集
天草市教育委員会　p.30

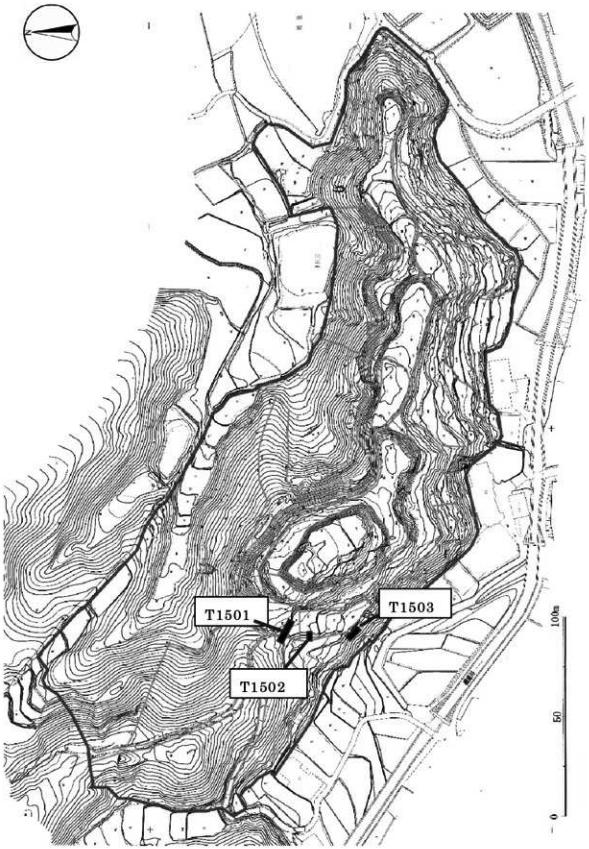


図２：平成２７年度発掘調査のトレンチ配置図（第３次発掘調査）

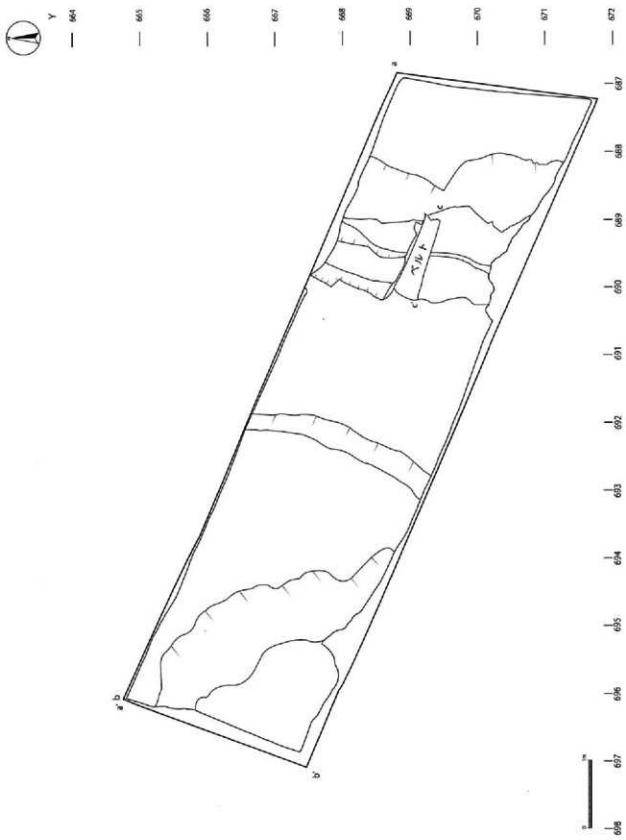
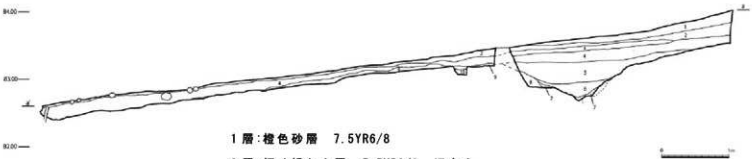

Y
664
665
666
667
668
669
670
671
672
a
b
b'
a'
c
c'
ベルト
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
0
1m
X

図３：Ｔ１５０１平面図

1 層:にぶい褐色土層　7.5YR5/4

2 層:明褐色頁岩風化土層　7.5YR5/6



1 層:橙色砂層　7.5YR6/8

2 層:極暗褐色土層　7.5YR3/3　旧表土

3 層:にぶい黄褐色土層　10YR4/3　ややしまる・耕作土

4 層:にぶい黄褐色土層　耕作土

5 層:褐色礫層　10YR4/4　頁岩の大小礫を含む

6 層:灰褐色土層　7.5YR4/3　C-C' 1 層と同じ　礫や不純物なし

7 層:明褐色頁岩風化層　C-C' 2 層と同じ

8 層:にぶい黄褐色土層　10YR5/4　地山

9 層:黄褐色土層　10YR5/6　しまる・ブロック石を含む

10 層:明赤褐色土層　5YR5/8　ねばる・不純物なし

11 層:暗灰黄色岩盤　2.5YR5/2

図4：T1501土層図

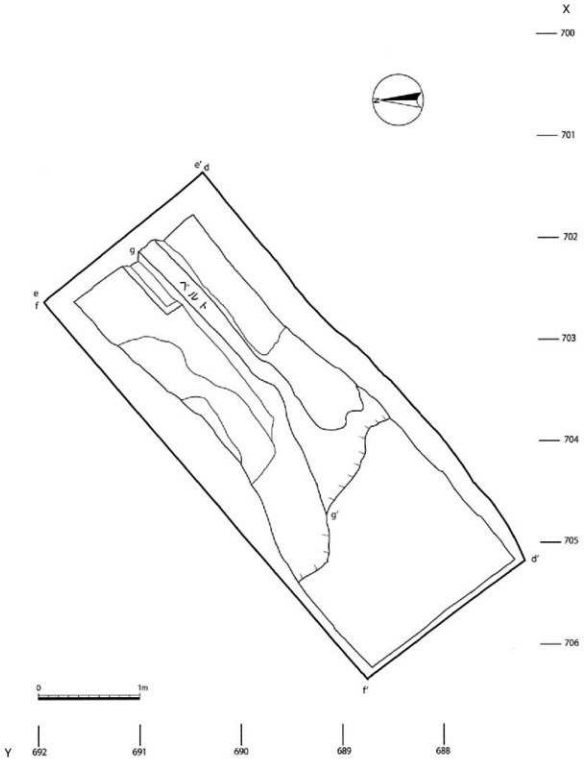
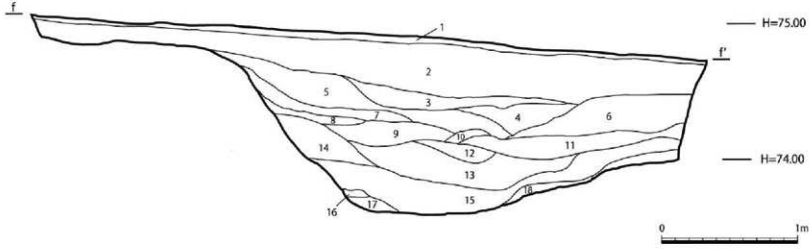

X
700
701
702
703
704
705
706
e'
d
g
e
f
ベルト
g'
d'
f'
0
1m
Y
692
691
690
689
688

図５：Ｔ１５０２平面図



1 層:暗褐色土層　7.5YR3/4　表土

2 層:褐色土層　7.5YR4/3　耕作土

3 層:褐色土層　7.5YR4/4　やわらかい・炭化物含む

4 層:にぶい褐色土層　7.5YR5/3　ややしまる

5 層:にぶい褐色土層　10YR5/4　炭化物含む

6 層:にぶい橙色土層　7.5YR6/4　ガチガチにしまる・地山ブロック含む

7 層:にぶい黄褐色土層　10YR5/4　やわらかい・地山ブロック含む

8 層:にぶい黄褐色土層　10YR4/3　やわらかい・地山ブロック含む

9 層:にぶい黄褐色土層　10YR4/3　しまる・炭化物含む

10 層:にぶい褐色土層　7.5YR5/4　ややわらかい

11 層:褐色土層　10YR4/4　ややわらかい・炭化物含む

12 層:にぶい黄褐色土層　10YR5/4　しまる・炭化物含む

13 層:にぶい黄褐色土層　7.5YR5/3　ややしまる・炭化物含む
シルト状の灰黄褐色ブロックが入る

14 層:黄褐色土層　10YR5/6　かなりしまる・地山ブロック含む

15 層:暗褐色土層　10YR3/4　しまる・炭化物含む

16 層:暗褐色土層　10YR4/4　炭化物含む

17 層:褐色土層　10YR4/4　粘性あり・ブロックなし

18 層:にぶい黄褐色土層　10YR5/4

図6：T15O2土層図①

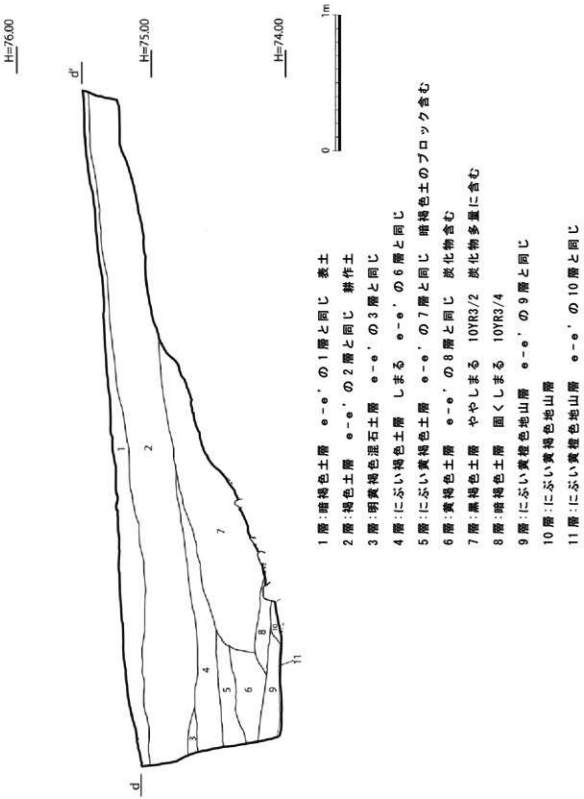
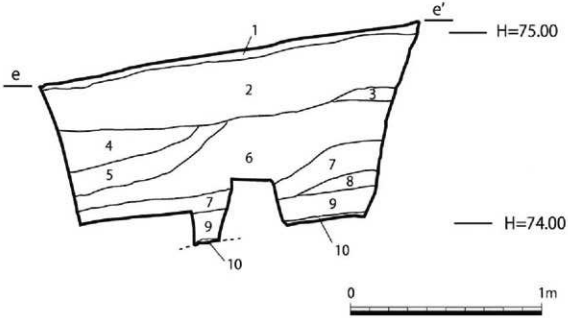


図７：Ｔ１５０２土層図②



1 層：暗褐色土層　f－f’の 1 層と同じ

2 層：褐色土層　f－f’の 2 層と同じ

3 層：明黄褐色混石土層　ガチガチにしまる　10YR6/6　地山ブロック多量

4 層：にぶい褐色土層　ガチガチ　f－f’の 6 層と同じ

5 層：褐色土層　f－f’の 11 層と同じ

6 層：暗褐色土層　かなりしまる　f－f’の 15 層と同じ　炭化物含む

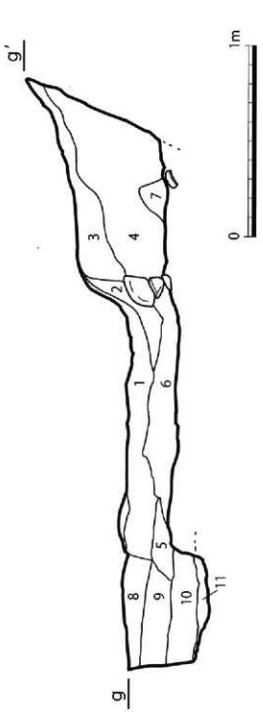
7 層：にぶい黄褐色土層　ややわらかい　f－f’の 18 層と同じ

8 層：黄褐色土層　しまる　10YR5/6　頁岩粒、炭化物含む

9 層：にぶい黄橙色頁岩風化地山層

10 層：にぶい黄橙色地山層　10YR6/4

図８：Ｔ１５０２土層図③



1層：黒褐色土層　d－d’7の層と同じ
2層：にぶい黄褐色土層　やわらかい
3層：黒褐色土層　1層と同じ
4層：褐色土層　やややわらかい　10YR4/3　若干の炭化物含む
5層：暗褐色土層　d－d’の8層と同じ
6層：暗褐色土層　10YR3/3　1層と同じ　多量の炭と礫を含む
7層：にぶい黄褐色土層　やややわらかい　10YR5/4　炭化物含む
8層：暗褐色土層　e－e’の6層と同じ
9層：にぶい黄褐色土層　e－e’の7層と同じ
10層：にぶい黄橙色真岩風化地山層　e－e’の9層と同じ
11層：にぶい黄橙色地山層　e－e’の10層と同じ

図9：T1502土層図④

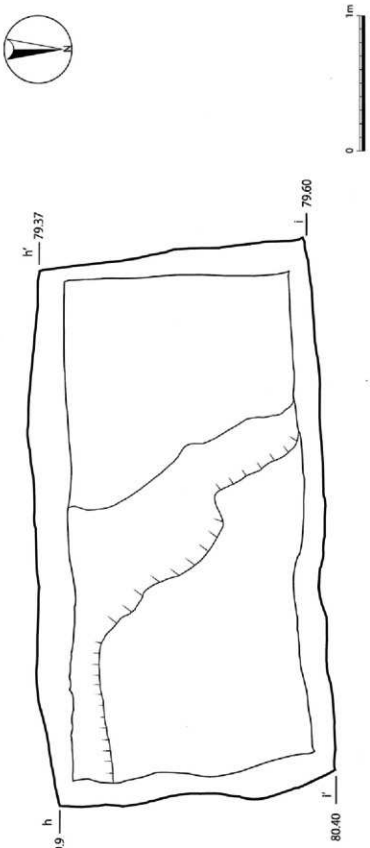
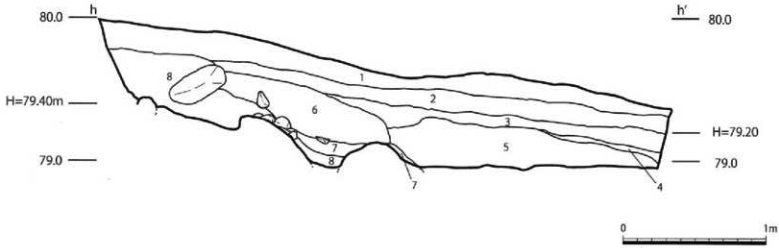


図 10：Ｔ１５０３平面図



1 層：黒褐色土層　7.5YR3/2 腐葉土・表土

2 層：褐色土層　10YR4/4 しまりあり・耕作土

3 層：黄褐色土層　10YR5/6 しまる・地山の礫ブロック含む

4 層：明黄褐色砂質土層　10YR5/6

5 層：黄褐色土層　10YR5/8　かなり固くしまる

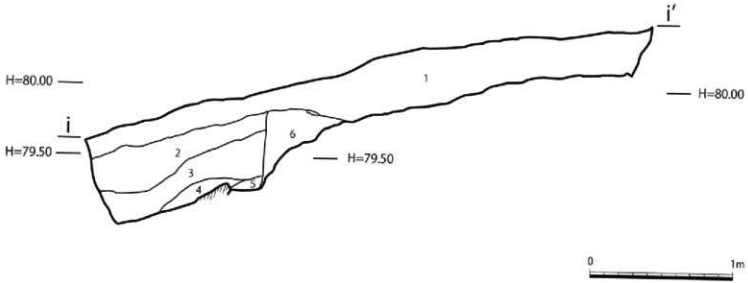
地山ブロック多数・灰黄褐色、橙のシルトブロックが散見

6 層：暗褐色土層　10YR3/4　ややわらかい

7 層：にぶい黄褐色土層　10YR3/4　径 5～18 cm程度の地山の礫が多量

8 層：黄褐色砂質混礫層　10YR5/8　地山

図 11：T 1 5 0 3 土層図①



1層：黒褐色土層　h-h' の1層と同じ

2層：褐色土層　頁岩ブロック・砂岩ブロックを含む

3層：にぶい黄褐色土層　10YR5/4　地山ブロック多数・h-h' の5層と同じ

4層：にぶい黄褐色土層　10YR5/4　灰黄褐色のシルト状ブロック含む

5層：褐色土層　10YR4/4

6層：黄褐色砂質混礫層　10YR5/6　地山風化層

図12：T1503土層図②

第２節　平成２７年度出土遺物

平成 27 年度（第 3 次）発掘調査の出土遺物は以下のとおりである。なお、殆どが小破片であり、図化できるものは少なかった。また、注記できないほどの小片は表にもカウントしていない（表 1/写真図版 13・14）。

■Ｔ１５０１（図１３）

瓦質土器が 4 点と青花が 1 点、近世陶器とみられるものが 1 点出土している。図 13 は全て瓦質土器である。火舎とみられ、1 は堀底と見られる層、2 は地山直上から出土している。3 の出土層位は不明である。

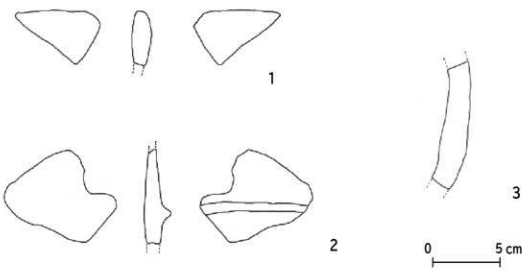


図 13：Ｔ１５０１出土遺物実測図

■Ｔ１５０２（図１４）

土師器が 30 点、青磁 4 点、白磁 4 点、染付 1 点、青花 8 点、瓦質土器 6 点、褐釉壺 1 点、鉄滓 1 点が出土している。出土量は最も多いトレンチであるが、殆どが小破片であることに留意されたい。4 は瓦質土器で地下 70～110 ㎝出土の一括資料である。5 は白磁皿である。復元高台径は 6.2 ㎝、残存高は 1.3 ㎝で、胎土が粗雑で焼きが甘い。畳付が釉剥ぎされている。6 はＴ1502 一括資料の瓦質土器で、復元口径は 15.6 ㎝である。焼成は甘く、灰色の焼き色がついて

おり、内側の一部が黒く変色している。ただ、残存している口縁部が僅かしかないため、申し訳ないが復元口径は間違っている可能性がある。7 は景徳鎮窯系の青花埦で 15 世紀後半に位置づけられる。地下 85 cmの地点から出土している。復元口径は 7.4 cm、復元底部径は 5.2 cm、残存高は 2.8 cmである。内面に釉薬はかかっていないが、外面の釉薬が垂れたものが付着しており、ロクロ成形の跡も明瞭に残る。8 はトレンチ中央～西側のサブトレンチ内一括資料の白磁皿である。復元口径 10.0 cm、残存高は 2.2 cmで、径 0.1 mm程度の黒い粒が散見される。15 世紀後半～16 世紀にかけてものと推定される。9 は翡翠釉が施された小皿で、復元口径 6.3 cm、復元高台径 3.5 cm、残存高 1.1 cmである。内外面ともに翡翠釉が施してあるが、畳付と高台内には施釉されない。時期は 16 世紀中葉～後葉と思われる。10 はＴ1502 付近で表採された土師器皿である。復元口径 8.0 cm、残存高 1.7 cmである。ロクロ成形した後に外面はヘラナデ、内面には一部にヘラ調整痕が残り、底部は糸切されている。

以上がＴ1502 出土遺物であるが、本トレンチからは鉄鏃(やじり)が出土したことが当時の現地説明会資料等から確認できる。

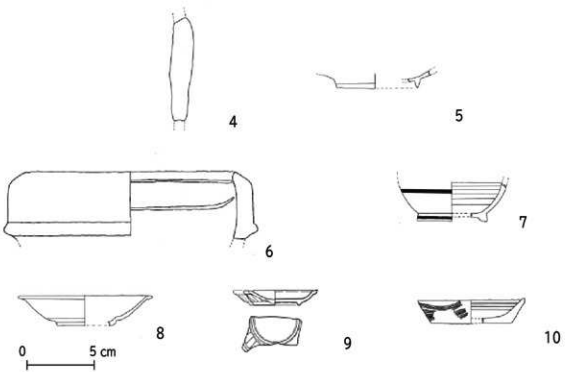


図 14：Ｔ１５０２出土遺物実測図

■Ｔ１５０３(図１５)

白磁が１点、近世陶磁器が１点出土している。他にも小指の爪サイズの土師器破片等があるが、表にはカウントしていない。11は景徳鎮窯の白磁で、褐色層の南側地下 15 cmから出土しており、16 世紀後半と思われる。復元高台径が 5.0 cm、残存高は 1.4 cmである。内外面に灰釉が施され、内面には黒丸文様がされている。畳付には釉薬は施されていない。高台内縁に砂利が付着している。12は表土層からの出土で、近世陶磁の埦と思われる。復元高台径 5.0 cm、残存高 1.4 cmで、内外面に白釉が施されている。内面の底部には釉薬はされておらず、外面も畳付は釉剥ぎされている。

図 15：Ｔ１５０３出土遺物実測図

■出土トレンチ不明遺物(図１６)

平成 27 年度(第 3 次)発掘調査で出土したことは確実だが、出土トレンチが分からない遺物を掲載している。13は漳州窯の青花皿で、内外面に施釉されているが、ひび割れがある。復元口径は 6.0 cm、残存高は 1.2 cmである。14 も漳州窯の青花皿で内外面に施釉されているが、ひび割れている。復元口径 7.4 cm、残存高 1.2 cmである。15は福建系の内部底面が露胎した白磁埦である。

図 16：出土トレンチ不明遺物実測図

トレンチ	番号	種別	器種	層位	色調			胎土	備考
					外面	内面	底面		
T1501	1	瓦質土器	－	堀底	明灰	明灰	－	粗雑	
T1501	2	瓦質土器	羽口？	地山直上	薄橙	橙	－	粗雑	
T1501	3	瓦質土器	－	堀底	明灰	明灰	－	緻密	
T1501	28	瓦質土器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1501	29	青花	－	一括	－	－	－	緻密	
T1501	30	陶器？	－	第４層	黒	黒	－	緻密	近世か
T1502	4	瓦質土器	－	中世層一括	黒	灰	－	緻密	地下 20 ～ 40
T1502	5	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	6	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	7	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	8	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	9	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	10	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	11	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	12	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	13	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	14	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	15	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	16	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	17	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	18	青磁	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	19	青磁	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	20	青磁	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	21	瓦質土器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	22	瓦質土器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	23	瓦質土器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	24	白磁	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	25	青花	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	26	青磁	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	27	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	
T1502	31	土師器	皿？	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	32	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	33	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	34	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	35	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	36	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	37	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	38	土師器	皿（底部）	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	39	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	40	土師器	皿	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	41	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	42	青花	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	43	白磁	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝
T1502	44	染付	－	一括	－	－	－	緻密	地下 70 ～ 110㎝・明治か
T1502	45	土師器	－	一括	－	－	－	緻密	地下 100㎝
T1502	46	青花	－	一括	－	－	－	緻密	地下 110㎝
T1502	47	白磁	－	褐色層	－	－	－	緻密	
T1502	48	土師器	－	－	－	－	－	粗雑	埋め戻し時
T1502	49	瓦質土器	－	－	－	－	－	緻密	
T1502	50	白磁	皿	黒褐色層	－	－	－	緻密	景徳鎮窯 15 世紀後半～ 16 世紀中葉
T1502	51	陶器	褐釉壺	黒色土層	－	－	－	緻密	
T1502	52	青花	－	黒色土層	－	－	－	緻密	景徳鎮窯系 15 世紀後半～ 16 世紀中葉
T1502	53	青花	－	黒色土層	－	－	－	緻密	景徳鎮窯系 15 世紀後半～ 16 世紀中葉
T1502	54	土師器	－	サブトレンチ一括	－	－	－	緻密	
T1502	55	土師器	－	サブトレンチ一括	－	－	－	緻密	
T1502	56	青花	－	サブトレンチ一括	－	－	－	緻密	
T1502	57	瓦質土器	－	南側サブトレ	－	－	－	緻密	地下 60㎝ 焼成が甘い
T1502	58	土師器	－	南側サブトレ	－	－	－	緻密	地下 60㎝
T1502	59	青花	－	南側サブトレ	－	－	－	緻密	地下 60㎝
T1502	60	青花	－	南側サブトレ	－	－	－	緻密	地下 60㎝
T1502	61	鉄滓	－	－	－	－	－	－	
T 1503	62	白磁	－	褐色層	－	－	－	緻密	景徳鎮窯　16 世紀後半か
T 1503	63	近世陶磁	－	表土層	－	－	－	緻密	

表１：平成２７年度（第３次）発掘調査出土遺物一覧表

第３節　平成２８年度トレンチ調査（第４次発掘調査）

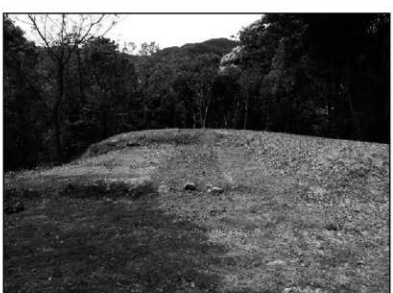
平成 28 年度実施の第 4 次発掘調査はＩ郭西側の土塁状の高まりの性格を把握する目的でＴ1601 を設定した（図 17）。

■Ｔ１６０１（図１８・１９/写真図版７～１１）

約 17.0m×約 2.0mで設定した。高まりの上に遺構は確認されず、土層からも土を積み上げた痕跡は見られない。地山である岩盤を削って横堀や竪堀、柱穴を造っていることから考えると、棚底城を普請する際にこの高まりを設けるように設計されていたことが示唆される。

トレンチ北東部に径約 20 cmの柱穴が確認されたことにより、サブトレンチを設けて 1 間×3 間の掘立柱建物を確認した。柱の間隔は約 1.8m～2.1mと不均等であり、柱穴の重複も見られない。なお、建物の性格は不明である。

柱穴のさらに北東にある現地表面では足首程度の高さで視認できる石積も断ち割って調査している。a－a’断面がその図であるが、裏込め石や根石も見られず、スケールと分層の記載がないため検証が難しい。ただ、本トレンチは表土層と黄褐色砂質土層の非常に薄い堆積であり、石積のある地点は特に薄い。中世の遺物が出土しているものの、Ｉ郭は昭和時代まで畑として利用されており、堆積土の薄さも考慮すると石積が中世に構築されたとは言えず、後世に開墾に伴って構築されたと考える方が自然であろう。



棚底城跡Ｉ郭西側の高まり

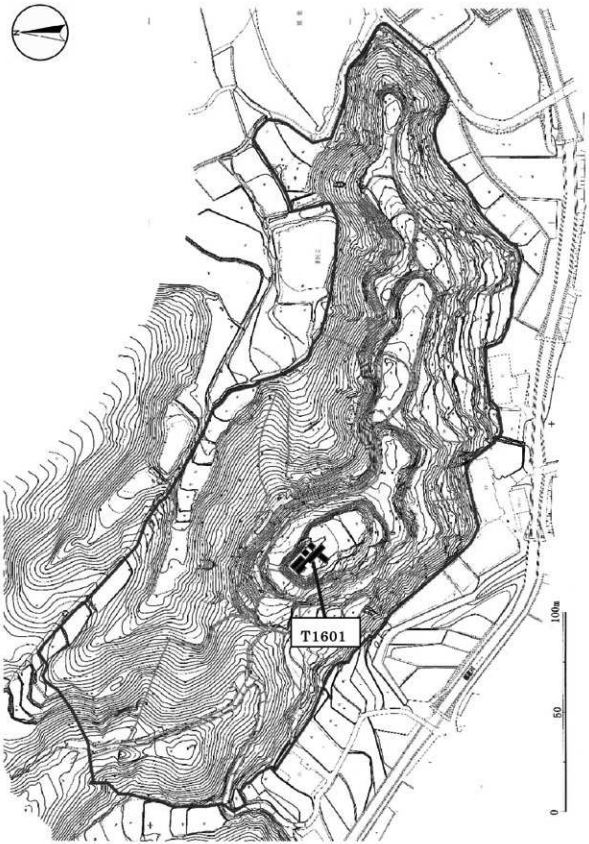


図 17：平成２８年度発掘調査のトレンチ配置図（第４次発掘調査）

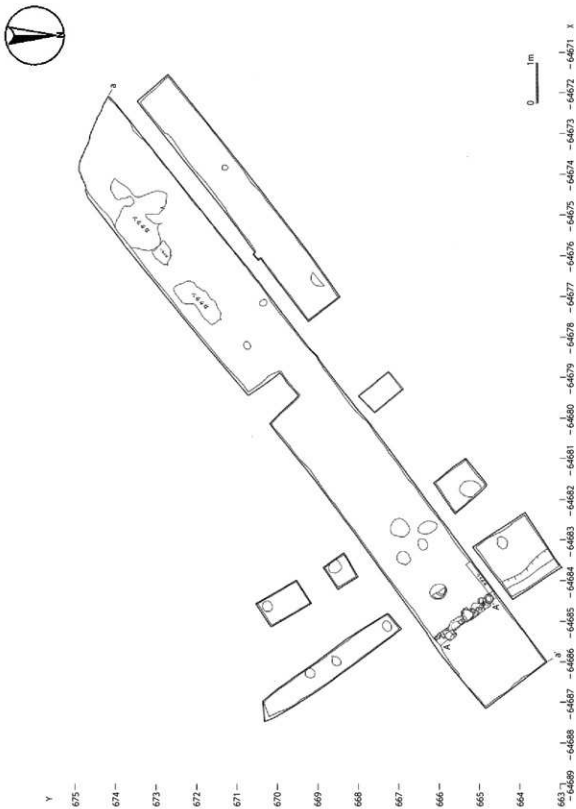
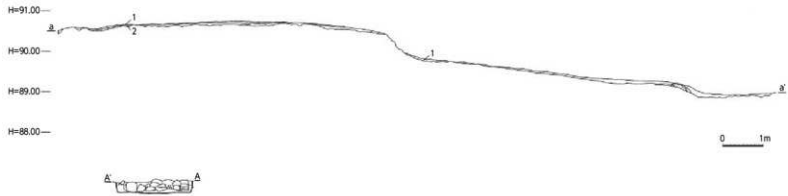


図 18：Ｔ１６０１平面図



1層：表土層　10YR4/4

2層：黄褐色砂質土層　10YR5/6　風化岩層

図19：T1601土層図

第４節　平成２８年度出土遺物

16 はＴ1601 の表土層から出土した景徳鎮窯産染付の端反り埦である（図 20/写真図版 14）。復元口径 10.6 ㎝、残存高 1.0 ㎝である。Ｔ1601 は柱穴等の遺構が検出されたものの、図化できるほどの遺物は殆どなく、出土量も少ない。

図 20：平成２８年度発掘調査出土遺物

トレンチ	番号	種別	器種	層位	色調			胎土	備考
					外面	内面	底面		
Ｔ 1601	1	染付	埦	黄色表土層	白	白	－	緻密	緑色で絵付け
Ｔ 1601	2	瓦？		岩盤面	黒	黒	－	緻密	滑石のようなものアリ
Ｔ 1601	3	青花	埦	表土・岩盤層	白	白	－	粗雑	
Ｔ 1601	4	土師器		北側撹乱	橙	橙	－	緻密	外面に巴形文アリ
Ｔ 1601	5	瓦質土器	すり鉢	岩盤上面	黒	灰	－	緻密	
Ｔ 1601	6	瓦質土器	すり鉢	ピット内	灰	灰	－	緻密	
Ｔ 1601	7	－	火舎	サブトレンチ	赤	赤	－	緻密	内面に煤アリ

表２：平成２８年度（第４次）発掘調査出土遺物一覧表

第４章　総　括

第１節　調査のまとめ

第３･４次発掘調査は『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を策定するための情報収集が主な目的である。本節で報告書内容についてまとめておきたい。

Ⅰ郭北東側を囲う土塁と横堀については旧倉岳町による平成 14 年度からの発掘調査で埋没していることを確認していた。第３次発掘調査ではⅠ郭西側にもそれらが延伸していることを確認した。横堀は明瞭に検出することができ、幅が約 2.0ｍの薬研堀で岩盤を粗く削って造られていることが分かった。一方、土塁は明瞭に検出されなかった。ただ、横堀が立ち上がると岩盤の平坦面が約 4.0ｍ続き、僅かに段落ちすることが確認できた。先の調査で土塁を断ち割った際に「基底部は幅 4.7ｍ」と報告されていること等からこの平坦面は土塁の基底部と想定している。ただし、土塁を崩した際に生じる土の行方が分からない。横堀はⅠ郭側からの流れ込みで埋まっており、基底部より西側には表土と耕作土しか土層に見られないのである。過年度調査で確認した土塁は「版築状態」とあることから相当に引き締まった土を「後世にかなり削」っているため、それが土塁を崩した周辺に見られないことは不自然であると言わざるをえない。したがって、土塁の基底部と「想定される」とした。

竪堀は現地で表面観察できる箇所からの延長を確認した。トレンチ設定地は現在、平坦面になっており、竪堀を塞ぐように大きな石積が構築された上にそれが形成されている(写真図版 12)。今回、そこに竪堀が確認できたことにより、竪堀を塞ぐようにある石積は後世の造作であると断定できた。また、破片であるが翡翠釉小皿等が出土したことも棚底城跡出土陶磁器の多様性を象徴しているように思える。竪堀は横堀同様に薬研堀で、トレンチ内で僅かに西側に曲がっていることができた。

第４次発掘調査はⅠ郭西部にある土塁状の高まりの性格の把握、掘立柱建物 1 棟の検出、石積の性格の検討を行うことができた。土塁状の高まりは土を盛って形成された痕跡は見られないが、法面は岩盤を削って造られていることが確認できた。第３次発掘調査までの成果で、横堀や竪堀が岩盤を削って造られていることが分かっているため、それを加味すると、あえてこの高まりを残していることが示唆される。つまり、棚底城を普請する段階でこの高まりを残すように設計されていたということになる。このような地形は攻め手側から見た際のⅠ郭の目隠しかつ切岸の高さの確保という役割があった可能性が考えられる。

掘立柱建物は径約 20 ㎝の柱で 1 間×3 間の規模と判明した。柱の間隔は約

1.8～2.1mと不均等であり、柱穴の重複は見られない。Ⅰ郭では居館跡と舞台状遺構に加え、この掘立柱建物が建っていたことが確定した。居館跡とされる部分は建物の復元プランが定まっていないため、明確な棟数は断定できないが、Ⅰ郭において未発掘箇所は殆どないため、建物跡がこれ以上に出ることはないと思われる。

Ⅰ郭の小規模な石積についても検討した。中世に構築されたか否かで整備だけでなく、城跡の評価にも関わってくる重要な要素である。石積は麓の棚底集落において安山岩を利用して防風石垣が構築されている。棚底城跡内においても畑の利用に伴ってつくられた石積が多数存在することが『史跡棚底城跡保存管理計画書』に明記してある。断ち割ると、裏込め石や根石はなく、地山に乗るように石積は存在しているようである。T1601 の土層は非常に堆積が薄く、石積のある地点はそれが顕著である点や昭和時代まで畑として利用されていたことを考慮すると、中世に構築されたとは言えず、後世の開墾に伴って構築されたと考えるに至った。Ⅰ郭の整備は建物跡の復元等を行う予定であるため、その施工にあたり、保護盛土をする必要がある。その際に石積の評価をつけておかなければ、施工の方法にも影響が出る。本報告書においては中世の石積とは言えないと評価しておきたい。

出土遺物については、発掘調査から本報告書の刊行まで約5年が経過しており、その間に出土層位や地点が分からなくなってしまったものが多数ある。そのため、遺物カードに記載されている情報を表1・2にまとめている。したがって、土層図と表の記載に齟齬が生じている箇所が多い。また、筆者の力量不足により、分類を行うまでに至らなかった。

写真図版編

写真図版１　Ｔ１５０１平面

写真図版２　Ｔ１５０１横堀土層

写真図版３　Ｔ１５０２平面

写真図版４　Ｔ１５０２土層

写真図版５　Ｔ１５０３平面

写真図版６　Ｔ１５０３土層

写真図版７　Ｔ１６０１東側平面

写真図版８　Ｔ１６０１西側平面

写真図版９　Ｔ１６０１掘立柱建物検出状況

写真図版１０　Ｔ１６０１　石積検出状況

写真図版１１　Ｔ１６０１　平面

写真図版１２　竪堀を塞ぐように構築された石積の一部

1
2

3
4

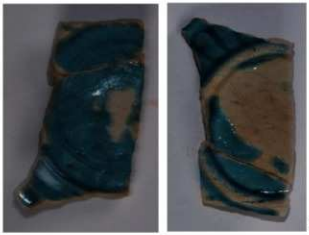
5

6

7

8

写真図版１３　平成２７年度（第３次）発掘調査出土遺物


9

10

11

12

13

14

15

16

写真図版１４　　平成２７・２８年度(第３・４次)発掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきたなそこじょうあと
書名	国指定史跡棚底城跡Ⅳ
副書名	平成27・28年度発掘調査（第3・4次発掘調査）
巻次	
シリーズ名	天草市文化財調査報告書
シリーズ号	第8集
編著者名	宮崎　俊輔
編集機関	天草市教育委員会
所在地	〒863-8631　熊本県天草市東浜町8番1号
発行年月日	2020年3月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
棚底城跡	熊本県 天草市 倉岳町	43215		32度 24分 52秒	130度 20分 2秒	3次：2015.12.21 4次：2017.1.5 ～ 3次：2016.3.31 4次：2017.3.31	3次：32.7 4次:105.2	学術調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棚底城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	3次：横堀・竪堀 4次：掘立柱建物	土師器皿・青磁・白磁・青花・施釉陶器・瓦質土器・鉄滓等	
要約	棚底城跡は中世城館のうち、天草諸島で唯一の国指定史跡である。調査に先んじて現状変更許可をいただいたうえで、調査を実施した。3次調査ではⅠ郭を囲う2重目の横堀及び竪堀の延長を確認した。竪堀を塞ぐようにあった石積は後世に構築されたものと断定できた。4次調査ではⅠ郭西部にある土塁状の高まりの性格を考える上で参考となる結果が得られた。高まりは岩盤を削り残して形成されていたことから、普請する段階でそれを形成することが設計されていたことが示唆される。類似する地形は上津浦城跡や志岐城跡に確認できる。また、高まりのすぐ脇に掘立柱建物が1棟検出されたが性格は不明である。出土遺物は翡翠釉小皿等の比較的珍しいものもあるが全体的に少なく、出土品も殆どが小破片であった。				

天草市文化財調査報告書第８集

国指定史跡棚底城跡Ⅳ

平成 27・28 年度発掘調査(第 3・4 次発掘調査)

2020 年 3 月 27 日発行

編集：天草市観光文化部文化課

〒863-0023　熊本県天草市中央新町 15-7

℡ 0969-32-6784

発行：天草市教育委員会　〒863-8631　熊本県天草市東浜町 8-1

印刷：(株)印刷センター